連載 中国茶の真髄 第68回

人口減少問題と中国茶

明山茶業株式会社
取締役中国室長
張　文昕

1988年上海より来日。名門中国料理店等の勤務を経て現在に至る。生涯学習講師、中国茶高級評茶員。特技は卓球、イラスト。好きな食べ物は大戸屋の魚定食。

長らく首位だった中国が約60年ぶりに人口減

2023年1月22日、例年より少し早めの『春節』がやってきました。新型コロナウイルス感染症拡大を封じ込める「ゼロコロナ」政策から、「ウィズコロナ」に急転換したあと初めての春節となりますが、中国全土は長期の休みとなり、中国茶の輸入も2週間ほどストップになりました。

ところが春節に向けての準備が始まっていた1月17日、中国政府より衝撃の発表がありました。約60年ぶりに中国の人口が減少し、インドが中国を抜いて人口世界一となったのです。国連の「世界人口推計2022」(中位推計)によると、インドの人口は22年末時点で14億1700万人。一方の中国は、昨年末の人口が14億1200万人だったと発表。インドが約500万人上回ったことになります。

前述の推計によると、中国の合計特殊出生率の低下や、生産年齢人口(15~64歳)の減少、高齢化率の上昇も示されていました。長きにわたり世界一の人口を堅持してきた中国が人口減少に転じることは、中国経済にも影響が出ます。現地の関係者に聞くと、すでに中国茶業界も影響を受けていることがわかりました。

人口減少が中国茶業界に及ぼす影響について

以前も、中国茶業界は何度か働き手不足に陥ったことがありましたが、お茶業界が人手不足になると、特殊なお茶や、希少価値の高いお茶の生産に大きな影響を及ぼします。約5~6年前に人手不足が問題視されたときは、中国全土の中でも君山島だけで作られる希少価値の高い黄茶「君山銀針」が入手できなくなりました。原因は、熟練製茶師の高齢化と君山島のある君山区の人口が減り、後継者の育成がうまくいかなかったからだと言われています。

さらに、昨年も同じようなことがありました。弊社で輸入している工芸茶の生産量が激減したのです。工芸茶はご存じのように良質な緑茶にさまざまな花を仕込んで仕上げられた、目でも楽しめる特殊なお茶ですが、1980年代に安徽省黄山市の汪芳生氏が発案したのが始まりとされています。中国では花の王様といわれる牡丹の花を模した茶葉が、お湯を注ぐと一本一本の茶葉が開いて、中から色鮮やかな花が顔を覗かせ、世界各地にファンが多いことでも知られています。

この工芸茶は、すべて手作りであることに加えて、かなりの技術が必要とされるため、一人前になるには相当の年月がかかります。ところが、「君山銀針」同様に各産地の作り手が高齢者ばかりになり、生産量の増加が難しくなったのです。代表的な工芸茶「緑牡丹」もその一例で、今は入手するのが極めて難しくなっています。

中国の茶文化を守り継承していくために

日常的に飲まれる流通量の多いお茶は、製造工程が比較的シンプルな上に機械化に適用できるため、大幅に生産量が落ちることはありません。しかし、前述のような特殊な銘茶は手作りが多く、人口減少により大きな影響を受けます。この問題を解決するには、後継者の育成しかありませんが、今後も中国の少子化は加速するという声も少なくありません。今後も中国茶業界の動向を注視しながら、貴重な中国茶を日本の皆さんに提供できるように努めてまいります。

工芸茶は手間隙かけて茶葉を束ねた芸術品